

るんびに

第八十一号

楊林山 正光寺

波多正文

尼崎市東大物町1-3-7
(06) 6481-3253

降誕



瀧 良孝

(広島県・正覚寺住職)

「今からうそを言います」とうそをついても、うそにはなりません。本当のような顔をしてうそを言うから、うそになるのです。うそは怖い、まじめな顔でうそを言っていると、自分までそのうそにだまされてしまいます。今の世は、なんとうそが多いことでしょう。いろんなうそに取り巻かれ、みんなうその人生で終わっていくのでしょうか。誕という漢字を辞書でみますと「うそ、いつわり」とでています。お釈迦様の「出生を、人びとは「降誕」すなわち「うそ、いつわりの世に降り立って、真実を教えてください」ださったお方」と受け止めました。お釈迦様は、この世に生まれられて、後に修行してさとりをひらき、仏になられました。そして人間の苦悩から開放される道を教えてくださいました。それは目に見えない神や仏の思いがけない奇跡を説かれたものではありません。どんな状態にな

っても、幸せに生き抜く智慧を得させようとされたのです。お念仏の仏道も、阿弥陀さまのおこころを聞かせていただいて、その智慧と慈悲のはたらき(真実)に目覚め、苦しみを楽しみに、悩みをよるごびに転じて生きていく道なのです。四月八日は「花まつり」。みんなでお祝いしましょう。(大乗4月号より)

親も辛抱、子も辛抱

大平 光代

(弁護士、元大阪府助役)



泣く子は育つ。少々泣いても放っておくと辛抱を覚え、お腹が空いて食欲も出る……昔の子育ては大らかでしたね。ところが最近のある育児書によると、子どもを泣かせると欲求不満になるとのこと。核家族の中、育児書頼りのお母さんは、泣かせまいとつい至れり尽くせり……。併護士として少年事件を担当してきましたが、道を外す少年少女たちには2つのタイプがあります。ひとつは親の期待に応えようと良い子を演じてきた結果、爆発してしまったタイプ。もうひとつは

甘やかされ放題で欲しいものをすべて与えられ辛抱をすることを学んできていないタイプ。どちらが手に負えないかという間違いなく後者です。前者は本来、優しい心根を持っていますから、自分を理解してくれる人に出会うと立ち直ることは

早いようです。ところが、後者は譲り合つ、思いやるといった人として必要なことを学んでいないので、言葉も心も通じ合わないのです。

「泣く子は育つ」には、幼い時期にきちんとつけをすることが大事という意味も含まれているのですね。今の親はどうも「叱らなすぎ」のように感じます。親もまた辛抱が必要で、子どもと一緒に泣きながら成長することこそ子育ての醍醐味ではないでしょうか。子どもは社会からの預かりもの。独り立ちさせて社会に還すことが親の役割です。

私自身はとても辛抱強い子でした(自分でいうのもナンですが)。頂きものはまずお仏壇へ、月参りの住職さんが来られた時はおとなしく座っていること——おばあちゃんが日々の暮らしの中で教えてくれました。この辛抱強さが併護士の試験勉強に役立ったことはいつまでもありません。

(大乗4月号より)

正光寺行事

◆宗祖降誕会

五月十日(土) 午後二時～四時
ご講師 阿部信幾 師

◆納骨堂永代経法要

六月十日(火) 午後二時～四時
ご講師 谷川弘顕 師

◆歎異抄を学ぶ会

毎月第三土曜日 午後二時～三時三十分